

# 分析実存主義とは何か：分析哲学の進歩，あるいは退廃\*

久木田水生

2015年12月19日

名古屋哲学会

南山大学

## 概要

メッツ (Thaddeus Metz) は著書 *Meaning in Life* ([2]) において「生の意味」という問題にアプローチをするのに分析哲学的な手法を用い、そしてそれを Benatar の言葉を借りて「分析実存主義 analytic existentialism」と呼んだ。Kukita [1] はこのメッツのアプローチに対していくつかの疑問と批判を提示した。メッツはそれに対して Metz [3] において部分的に答えている。本発表では Metz [2] で展開された生の意味についての理論とそれに対する Kukita [1] の批判、さらにそれに対する Metz [3] における再反論を紹介する。その上で、分析哲学の現代における展開というより広いパースペクティブのもとからメッツの試みを評価する。

## 1 序

分析哲学の創始者たちは、言語とその背後にある論理を分析することによって明らかすることができる問題にもつばら焦点を当て、道徳的な問題や宗教的な問題、あるいは形而上学的な問題からは距離をおいてきた。本当にそれができていたのかどうかは置いておいて、ともかく彼らはそう公言してきた。彼らが扱ったのは主に数学的言明や、『ウェイバリー』の著者はスコットである」といった日常言語の、それ自体としては哲学的に「深遠な」主題を含んでいないような文であった。彼らがやろうとしたのは数学の言語あるいは日常言語から曖昧さ不明瞭さを可能な限り排除して、明晰に語るための道具としての言語を洗練させることであった。そしてそのような明晰な言語によって語る事が出来ない問題については、「沈黙」することを選んだのである。

およそ1世紀がたった現在、分析哲学はその創始者たちが洗練させた道具を使って、創始者たちが「沈黙」することを選んだ主題に果敢に切り込んでいる。今では分析形而上学、分析倫理学、分析美学などのサブジャンルが確立して、盛んにアイデンティティ、時間、世界、神、善、美などのテーマについて議論をしている。そして近年では「分析実存主義 analytic existentialism」などと呼ばれる分野も誕生している。

分析哲学に何が起こったのか？ このことを理解するためにはもちろん分析哲学の1世紀の歴史を丹念に辿らなければいけない。だが現代の「分析〇〇学」者の著作を見ることは一つの手がかりを提供するだろう。この意図の下で本発表では分析実存主義の代表的論者、Thaddeus Metz, *Meaning in Life* を取り上げる。

メッツはこの著作において「生の意味」という問題にアプローチをするのに分析哲学的な手法を用い、そしてそれをベネター (Benatar) の言葉を借りて「分析実存主義 analytic existentialism」と呼んだ。Kukita [1] はこの Metz のアプローチに対していくつかの疑問と批判を提示した。Metz はそれに対して Metz [3] にお

---

\* 本原稿は2016年5月11日にアップロードされたものです。それ以前のものにあったタイポを修正しています。

いて部分的に答えている\*<sup>1</sup>本発表では Metz [2] で展開された生の意味についての理論とそれに対する Kukita [1] の批判, さらにそれに対する Metz [3] における再反論を紹介する. その上で, 分析哲学の現代における展開というより広いパースペクティブのもとから Metz の試みを評価する.

## 2 Metz, *Meaning in Life* の概要\*<sup>2</sup>

Metz, *Meaning in Life* は, ここ数十年の間に主に英米の影響力のある哲学者が「生の意味」について書いてきたことを整理し, その背後にある「生の有意味性」についての直観を説明するような理論を構築することを目指したものである. このためにメッツは多くの既存の理論をいくつかのカテゴリーに分類し, それらを慎重に吟味して, 人々の判断の核にある直観を汲み出している.

既存の理論をサーベイした後, これらの英米の分析哲学者たちが「意味のある生」と考えるものと「意味のない生」と考えるもの之间を隔てるのは何かについて, メッツ自身の理論を提示する. このようにメッツの理論の価値は, ここ数十年の英米の哲学者が考えてきたこと, そしてその背後にある直観をどれだけうまく取り扱っているかに依存している. 従って生の意味についてこれらの英米の哲学者と直観を共有しない人間(私を含めて)にとってはメッツの理論はほとんど妥当には思えないだろう. 彼らの直観や前提について私の感じる違和感については次節で述べる.

メッツがこの著作で答えようとした主要な問いは, 「人の生をより有意味/無意味にするのは, その生のいかなる特徴か?」というものである. 2章においてメッツは「生の意味」という概念を解明することでこの問をより明晰化する. 彼は「生の意味」を構成するものについての問いは以下の互いにオーバーラップする, あるいは「家族的類似性」を持つ3つの問いのクラスターであると考え.

- いかなる目的が最も追求に値するか?
- 人はいかにして自らの動物的本性を超越することができるか?
- 誇りと賞賛に値する生とは何か?

これらは個々には生の意味という概念を十分に捉えることが出来ないが, この3つが合わさると生の意味の概念を十分に捉えることができる, とメッツは論じる. この概念に従ってメッツは5-11章で既存の理論を評価する. それから12章で自身の理論を構築する.

3章でメッツは, 生の意味は生のある一時期についても, 生全体についても論じられると述べる. また生が「どれくらい」意味があるかという観点からも, 生が「差し引きで」有意味か否かという観点からも論じることができる, と述べる. 4章では生の意味が快や幸福それ自体とは異なる価値であることが論じられる.

5-11章では既存の理論が3つのカテゴリーに分類される. それは超自然主義, 主観主義, そして客観主義である. メッツはこのどれもが不十分であると考え. しかしその背後に働いている直観は救われるべきもの, 説明されるべきデータとみなす.

12章ではメッツは生の意味についての理論が満足すべき9つの要件を提示する. そしてその要件を満たす彼自身の理論を提示するのである. 生のある一時期に関する「どれくらい」の観点からの原理は次のとおりである.

---

\*<sup>1</sup> *Journal of Philosophy of Life*, Volume 5 (2015) で, メッツのこの著作に関する特集が組まれた. そこではこの本を扱った11本の論文と2本のエッセイが掲載され, さらにメッツ本人のそれらに対する応答も掲載された. このジャーナルは次のサイト閲覧できる. <http://www.philosophyoflife.org/>

\*<sup>2</sup> 本節の大部分は Kukita [1] の一部を翻訳したものである.

品位を下げるような生の安売りを禁じる一定の道徳的制約に違反することなく、自身の理性を用いて、人間存在の根本的な諸条件に対して合理性をポジティブに差し向ける、あるいは人間存在の根本的な諸条件を脅かすものに対してネガティブに差し向けるほど、その人の生はより有意義である。加えて人間存在の根本的な諸条件に対して合理性がネガティブに差し向けられるほどその人の生の意味は減じられる。

A human person's life is more meaningful, the more that she, without violating certain moral constraints against degrading sacrifice, employs her reason and in ways that either positively orient rationality toward fundamental conditions of human existence, or negatively orient it towards what threatens them; in addition, the meaning in a human person's life is reduced, the more it is negatively oriented towards fundamental conditions of human existence. (p. 233.)

さらにメッツは生全体の観点からの原理を提示し、そこから「差し引きで」の観点から生の意味を問うための公式を提示する。メッツはこの原理が上述した9つの要件のすべてを満たすこと、生に意味をもたらすと考えられる典型的なもの、すなわち道徳的達成、真理の発見、美の創造が実際に生の意味を増大させることを論じる。

メッツはこれらの原理からなる理論を「根本性理論 fundamentality theory」と呼ぶ。この理論が完全ではなく、これがうまく取り扱えない事例があることは認めながら、彼はこれが今まで提案された主流の理論の中では最善なものであると結論付ける。

彼が自身の理論の利点と考えるのはその説明力である。この理論はこれまでに提唱されてきた主要な理論の多くの真理の核と思われるもの、そしてその基礎にある直観を説明することができる。メッツは、多くの理論に共有されている共通の特徴を抽象し、またその抽象に含まれていない直観を捉えるための条件を付け加えることで、この目標を達成しようとしている。メッツの理論が抽象的で複雑で長々しいのはこの理由による。

ある理論が既存の理論を取り込むことで認識的な価値を生むのは、それがより多くの現象をより少ない原理で扱えるからである。新しい理論が既に認識されている原理を寄せ集めただけならばその価値は低い。それゆえ理性、道徳的制約、生の物語性、生の部分と全体の区別などを含めたことはそれほど独創的な仕事ではないだろう。一方で否定的な条件（生の意味は減じられようということ）は、メッツによればこれまでの理論にはなかった要素であるので、メッツの理論のメリットかもしれない。

メッツの理論の最大のメリットは生に意味をもたらす対象を「人間存在の根本的条件」として特徴づけたことである。この一般化によって、生を有意義にすると考えられる典型的なもの（道徳的達成、真理の発見、美の創造）が説明でき、そして生の有意義性と快や幸福それ自体とを区別することができる、とメッツは言う。しかしこの一般化は私にはあまりに一般的かつ抽象的にすぎると私に思われる。人間存在の根本的条件とは、人間の条件の他の多くに対して大部分の責任があるもの（largely responsible for many other human conditions）と定義される。メッツはこの概念は比較的、曖昧性を免れていると述べるが、私にはこの概念が何を意味するかがはっきりしない。例えば美の創造について、メッツはある芸術作品が偉大なものである、すなわち芸術家の生に大いに意味をもたらすものであるのは、単に普遍的というのではなく根本的なものを扱っていないといけない、という。そして道徳性、死、戦争、愛、家族などは根本的なものである一方、排泄や塵などは普遍的だが根本的ではないという。この区別は極めて恣意的であるのみならず、端的に誤りだと私に思われる。例えば芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」、*「蚤虱馬の尿する枕もと」*など俳句は、メッツによれば人間存在の根本的な条件についてのものではなく、従って偉大な芸術ではない。しかしこれらの俳句は実際には素晴らしい芸術作品として高く評価されているものである。従ってメッツは、英米の分析哲学者の感覚で

はこれらの俳句は偉大な芸術と認められないというのではないが、次のどちらかを認めなければならない。(1) これらの俳句は人間存在の基本的な条件についてのものである、または (2) 偉大な芸術は必ずしも人間存在の根本的な条件のものについてのものでなくても良い。(1) を選ぶならばメッツは根本性が彼が考えているよりも恣意的であいまいであることを認めなければならない。(2) を選ぶならばメッツの理論は偉大な芸術を作ることが作者の生の有意味性を増大させるということを説明できないということになる。

メッツのこの批判に対する返答は、芭蕉の句は表面的に言及している事物についてのみではなく、実際には自然の中での経験、貧困の苦しみなどの人間存在の根本的条件に言及しているのではないか、というものだった。そうかもしれないしそうじゃないかもしれないとしか言いようがない。しかし私は「理性を用いて」、「合理性をそこに差し向け」た結果だとか、動物的本性を超えるものであるとか、そんな言葉で芭蕉の句を評価するのがふさわしいとは思わない。この点は水掛け論にしかならないので追求しない。それにしてもそういったアドホックな補足をいちいち加えなければならないのならメッツの試みの価値は明らかに減じる。

メッツの理論は彼が思うほどうまくいっていないかもしれない。しかし彼の理論が完全なものでないことは彼自身も認めている。次節ではメッツに対してより根本的な批判を試みる。

### 3 メッツへの批判とその応答

上述したように、メッツの理論はここ数十年の間に主として英米の分析哲学者が「ある人の生を意味のあるものにすることは何か」という問題について述べてきたことの背後にある直観を捕らえようとしたものである。従ってそこでは彼らの「この人生は大きな意味がある」とか「この人生にはあまり意味がない」といった個々の判断については疑問に付されることがない。しかし私はこういった判断において、つまり直観のレベルにおいてメッツらの判断に大きな違和感を持った。そのためにこの本に書かれていることのほとんどに対してまったく同意できなかった。この節ではメッツの直観や前提についての私の疑問を述べ、それに対する Metz [3] の応答を紹介する。

Kukita [1] で私は次のように書いた。

メッツと私の最大の不一致は、個々の人の生が有意味であるかどうかに関する判断にではなく、何らかの客観的な基準でもって人々の生を有意味なグループと無意味なグループに分けることができるという前提に存している（もっともメッツは通常、生の特定の側面、すなわち「どれぐらいの」意味があるかにより関心があるようだが）。私はいかなる基準によっても自分の生を他人から有意味であるとか無意味であるとか判断してほしくない。また私は他人の生を有意味だとか無意味だとか判断しないし、人々の生を有意味性の順序でランク付けるようなこともしない。何らかの客観的な基準によって人々の生の有意味さを比較できるという前提を共有することができないので、この本でメッツが達成しようとしたことを評価することができないのである。(212)

これに対する Metz [3] の返答は以下のとおりである。

あなたの生は誰々の生ほど有意味ではない、と人に伝えることは通常、気分を害することだろう。そしておそらく森岡と久木田がこの種の評価を完全に拒否するのはこのためである（久木田の 2015, 211 での傲慢さについての言及を見よ）。しかしながらある判断を伝えることが相手の気分を害するという事実はその判断が偽であるということの意味しない。結局、あなたは醜いと人に伝えることがその人の気分を害するからといってその人が醜くないということにはならないのだ。道徳的な遠慮からある判断を

人に伝えることを控えるということと、その判断の真偽は別物である。(244)

「醜い」という例を持ち出した不用意さは予想外だったが、おそらくこのようなりアクションがあることは私も予想していた。なぜならメッツは生の意味について「自然主義」かつ「实在論」を採ると明言していたからである。Metz [2] では次のように述べられている。

経験的かつ可謬的な方法によって私たちが「水」と呼ぶ様々なものが H<sub>2</sub>O という化合物によって構成されていることを学ぶことができるように、価値についての实在論によれば、同様に確かに「意味がある」と言いたくなる生の条件は、突き詰めればある基本的な在り方 being と行い doing の合成であることを学ぶことができる。(7)

だとすればメッツが私の疑問に対して上のように答えるのは当然である。なので Kukita [1] で私は次のように書いていた。

メッツは私の議論に対して、これは好き嫌いや正しいか不正かの問題ではないのだ、と反論するかもしれない。ある人の生が有意味か否か、ある人の生が他の人の生より大きな意味を持っているか否かという事実の問題なのだ、と。なぜならメッツによれば生の意味は私たちの受け止め方とは独立の實在的な対象だからである。有意味な生は化合物 H<sub>2</sub>O として定義される水と比較しうるようなカテゴリーである。私が意味のない生を生きているという判断に対して私がどれほど抗議しようと、それは揺るがしようなない事実なのだ。しかしメッツの自然主義的实在論は何の根拠も持っていない。少なくとも彼はそれを支持する証拠と言えるような何も提示していない。生の有意味性に対する基準を作る際に彼が訴えている知性、理性、道徳性などの概念が、水が H<sub>2</sub>O として定義されているのと同じ意味で自然種であるかどうかは疑わしい。さらに生の意味の概念を明確化する際に彼は「家族的類似性」に訴えている。これはアドホックで恣意的に使えるという意味では便利だが、厳密な分類には何の役にも立たない道具である。このような不確かな基礎に基づいて生の意味に関して自然主義的实在論を主張するのは性急でドグマティックに過ぎるように思われる。(213)

この点に関しては Metz [3] は次のように答えている。

道徳性と意味が客観的でありうるということと、それらが私の示唆するように客観的であるという実質的な証拠を提供することは別のことであるということを示唆しながら、Tartaglia は提案されている实在論的見解に対して私が「正当化に繋がるようなことをほとんど何も」提供していないと述べている(2015, Kukita 2015: 213 も見よ)。しかしこれは私からすれば意図したことである。著書の中で述べたように、生の意味にまっすぐ焦点を当てるために私は込み入った形而上学的、メタ倫理的なディベートを避けたかった(Metz 2013: 7, 22n5, 170, 172; see also 111, 120, 134, 243)。私は道徳性と生の意味の实在論的説明を受け入れる決定的な理由を提供したということを示唆したつもりはない。そうではなく、私の限定された特定の目的は、第一に自然主義者が表面上いかにして不変的な道徳性を説明することが可能かを示すこと、すなわち神だけがそれを根拠づけることができるということが明白ではないと示すことであり(2013: 91-96)、第二に神の他にはいかなる種類の客観的価値も可能であるとは思えないために主観主義に固執する人々に考えなおしてもらったことであった(2013: 170-172)。(251)

正直、ここでメッツが何を弁明しているのかよく分からない。ある批判に対して「それは私が意図したことだ」と答えても批判に答えたことにはならないし、自然主義的实在論を擁護する議論をせず、どうやって彼

の言う「限定された」目的を果たせるだろう。しかし少なくとも彼は自然主義が正しいと主張しようとしてはいないらしいということは分かる。つまり彼は「もし生の意味について自然主義的实在論がありうるならこんなものだろう」と言っているに過ぎない。この理論が実際に効力を持つのは説得力のある議論によって自然主義的实在論が（「込み入った形而上学的、メタ倫理的ディベート」を経て\*3）サポートされたときである。だとすればメッツは必ずしも实在論にここでコミットしてはおらず、生の意味が「私たちの受け止め方と独立」ではない可能性をメッツは排除していない。しかしそれならば生の意味についての判断を拒否する私の批判を、「事実は事実」といって斥けることはできないはずだ。彼の言う「意味ある生の条件」などは英米の分析哲学者の頭の中だけにあるものかもしれない。そんなものに基づいて人の生を無意味なものとして断じることの正当性はどこにあるだろうか。意味のない生とは生きるに値しない生である。意味のない生を生きている人間は、生きていなくてもよい人間であり、死んでも私たちが気にかける必要のない人間である。

メッツの著作は、かなり極端ではあるが、現代の分析哲学者（の一部）のマインドセットを象徴していると思う。次節ではこれについて述べたい。

## 4 分析実存主義とは何か

Metz [2] は序章で、直観を理論構築の基礎に置くことについて説明する際に、次のように書いている。

私は直観が疑いなく自己正当化的 self-justifying であるとも、なら「基礎を提供するような foundational」ものであるとも示唆しない。逆に、直観が究極的には論理的かつ説明的に他の様々な主張とフィットするからということによって、あるいはそれらとの「反省的均衡」によって正当化されるとも示唆しない。……私は生の意味についての諸理論をもっともらしい主張によって評価することで満足する。もっともらしいというのはすなわちそれ自体が良い論証によって支持されており、それを使って評価される理論よりもともと説得力がある initially more compelling 主張ということである。この方法は明晰さ、証拠、原理、反例、そして最善の正当化への推論などの論理的徳を尊ぶものであり、今日の分析哲学者たちが標準的なものとして用いるものであり、それは彼らがどのような認識論的見解を採っているかに関わらない。それゆえにある人が私のプロジェクトを「分析実存主義」と特徴付けた (Benatar 2004: 1-3) ののであるが、これは適切である。

この文章はメッツら現代の分析哲学者と呼ばれる人々が分析哲学をどのようなものとして理解しているかをよく表している。彼らにとって分析哲学とは上で言われているような論証の作法、スタイルであり、そしてこのスタイルを使いこなすことができれば、‘analytic’ と呼ぶのが「適切」なのである。しかしもともとの分析哲学とはそのようなものではなかった。ラッセル、フレーゲ、ウィトゲンシュタイン、カルナップら、分析哲学の創始者たちがやろうとしたのは物事を明晰に語るために私たちの言語の使い方を吟味し、明晰さを阻害するものを取り除くことであった。これは水路を舗装するような作業である。ポイントは水路を舗装することによって水が澄み、異物が流れてきたときにはすぐにそれを見つけることができる、ということである。そうして彼らは哲学から不純物を取り除こうとした。その結果としてそれまで哲学において取り上げられてきた主題や概念や言葉を避けること（あるいはそれを他のより明晰なものに置き換えること）につながったのである。分析哲学の本質は、思考の乗り物である言語と論理を整備すること、そしてその上で思考を濁らせる異物を排

---

\*3 「込み入った形而上学的、メタ倫理的ディベート」が必要だと言っている時点で、人生と意味と H<sub>2</sub>O としての水の間の（少なくとも現時点での）違いは明白ではないだろうか？

除することにある。気をつけなければいけないのは水路をいくらきれいにしても水源が濁っていたら出てくるのは結局濁った水だということである。ところが現代の分析哲学者たちは先人が敷設した水路を使えばそれでOKとばかりに、そこに何でも流し込んでしまう。その結果が分析形而上学であり、その最も極端な形が分析実存主義なのだと思う。議論は整然としている、しかしそこで扱われている概念は明瞭には程遠い。

結局、メッツは上の引用で彼が約束したこと（とりわけ明晰さという論理的徳を尊ぶこと）を果たしてはいない。前節で論じたように肝心の「根本性」の概念が曖昧かつ不明瞭であるし、それ以外にも「理性」、「道徳性」、「動物的本性」など、説明を要する概念に訴えている。もちろん一つの著作の中でそれらのすべてを丁寧に説明することなどできないだろう。それならば少なくとも「これらの概念について十分に明らかにされたならば自分の理論は意味ある生の条件を明らかにしてくれるだろう」ぐらいの留保はつけてもらいたい。さらに言えば客観性を装うのをやめて、素直にこの理論は英米系の哲学者の考える生の意味についての理論であると述べるべきだった。実際 Metz [2] ではそれほど強く自然主義的実在論を主張しているわけではなく、それを「ひいきする favour」という言葉が使われていた。そして構成主義を採ったとしても、英米系の哲学者たちの考える生の意味の条件という対象も研究する価値があるものだろう、と述べているのである。私は本当に彼がそのように言っていれば良かったと思う。これらの留保をつけてさえいけば、彼の著作は英米の哲学者の生の意味についての様々な議論の良いサーベイであり、入門書ではあるのである。しかし彼が自然主義的実在論にこだわり、森岡と私の批判に対して「事実は事実」という反論をしたことで、彼はマンデラやマザー・テレサやアインシュタインやダーウィンやピカソの生には大きな意味があるが、「麻薬を買うために売春をする女」の生には意味がないという判断にコミットすることになった。

彼が自然主義を標榜したことには理由がないわけでもない。Stanford Encyclopedia of Philosophy の 'Naturalism' の項目 (Papineau [4]) によれば、自然主義者とは「超自然的」な存在者を拒否し、科学が「人間精神」に関する重要な真理へと至る（必ずしも唯一ではないにせよ）可能な一つの道と考える人々である。「良くも悪くも哲学者のサークルでは広く「自然主義」はポジティブな言葉とみなされている—喜んで自らを「非自然主義者」と任ずる現役の哲学者は今日ほとんど」おらず、「自然主義」という言葉は「特段、'informative' ではない」程らしい。「生の意味」のような主題を扱うことは科学とはかけ離れたことに思われ、ともすれば非自然主義者と疑われる可能性がある。従って現代の哲学サークルで異端視されないためにメッツは「自然主義」とあえて声に出さなければならなかったのかもしれない。けれども私は自然主義的実在論宣言は蛇足だったと思う。もし本当に科学的にやりたいのであれば生の意味について心理学的アプローチ（例えば浦田 [6]）や神経科学的アプローチ（例えばサガード [5]）を使うという方法もある。「私は自然主義者だ」と宣言することで、やっていることが科学に近づきはしないのである。メッツが重んじる論証の明晰さは科学の必要条件であるが十分条件ではない。科学的な研究は観察可能で、客観的で、再現可能なデータを与えられていなければならない。しかし私たちは例えば必然性、道徳性、美、神聖さ、生の意味などについて、人々の表明された意見のほかにそのようなデータを持っていない。そのためこれらを扱う際に分析哲学者は直観に頼るのである。しかしデータが科学的なテストにかけられない限り、その理論は科学とは呼ばれないのである。

## 5 結論

人生の意味と分析哲学と自然主義的実在論はよろしくない食い合わせである。

## 参考文献

- [1] Minao Kukita, “Review of Thaddeus Metz’ s Meaning in Life”, *Journal of Philosophy of Life*, **5**(3), 2015, 208-214.
- [2] Thaddeus Metz, *Meaning in Life*, Oxford University Press, 2014.
- [3] Thaddeus Metz, “Assessing Lives, Giving Supernaturalism Its Due, and Capturing Naturalism: Reply to 13 Critics of Meaning in Life”, *Journal of Philosophy of Life*, **5**(3), 2015, 228-278.
- [4] David Papineau, “Naturalism”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2015 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2015/entries/naturalism/>.
- [5] ポール・サガード著, 無藤隆, 松井由佳, 松井愛奈訳, 『脳科学革命：脳と人生の意味』, 新曜社, 2013.
- [6] 浦田悠, 『人生の意味の心理学：実存的な問いを生むところ』, 京都大学学術出版会, 2013.